



19
1707
5

横相新

山本

伊傳

同

出會三席目

冬詩軒素後撰

夕涼新話集卷の四

目錄

六十一

高貴見

高紅

六十二

文字の遠

酒好

六十二

直道

朱橋

六十四

おむ区

晴く

六十二

賣屋

曹裡

六十六

石取

丸く

六十七

長生書

布生

六十八

内為人

念着

印

夕
凡や金銀をたをまき粧づくのまふア中うまを
たまふまれば長生やうかひが表ハイまあう。結ハ海が
まらでびりまふ。ハテまひびとをまてハをたぬ。

ハ 鳥人

光源氏ひるぐんじの中ま男仕らうかひ今うまや融とちののいお
のひ出てもみまあまをぬるもとあんかあつ表ひらまをぬの
てうりハあひひかあまはぬの者ものをぬれひとぬ
はるまをぬるひのぬまははとあり「よはるまその
まのよだぐの出ては」ゆがぬるハ二月あまうよと

中うくまう中うまは表女をど月まうしてまあまは
まはけね何をうまうとして目をさまをぬい「ゆぞとて
ひまがうかひん事をせがたある希きのまま前まへのゆと
まをうかひをうまをぬるまをぬる

福 書 料

之日は通西ハれまゆらうらめりくとくどま
まをぬるまをぬるまのまをぬるまをぬるまをぬる
まをぬるまをぬるまをぬるまをぬるまをぬる
まをぬるまをぬるまをぬるまをぬるまをぬる

十七万石といふ端はまたこのものでもとらふたれ
 くれがえ違ひ二十六万石と云ふイヤ七万石やテ
 イヤ六万石と云ふてもあるはあつそいそで
 そんぢうわけごとくまうして大名港かみをさげせとあれ
 ぢいゆつりつる丁稚をぢりよしおしコリヤとあり
 いておち名がみをぢりておちとありはくまのぢ
 きしくい結つるおちりの戸をぢりよしハイ隣ともく
 えんばして大名がみをぢりて下よりませるぢやよ
 結つるものをたきおして今はよ大名がみを何よ



又録

又録

又録

古
よ
は

まるのどろぞいのくハハ 髪ぬくのやそやそんじ

つ春よかひ

こしこの春をひらいたもハハとおめその子をきつと
またきび彼女らろぞろの字とおひも春らんがうてぶ
ざらこのまはば猪もい出てよままといひを見て心を
こまひ俄々湯をほくひみかきたてて尻をどろ又春を
あておまが旦那も又ひをとりあてまはし「テモうはく
しんまどやけいであらまのくくわや

おやめの八橋

さる所の高は男子一人は世に新い見本春あよひ
あひとばあをぞ本家の代りとおもつ引なるとさ
つこの春よなれ初の前々と定紋の太のかり境
よ人形よとひーわくを高はくぐとあまのねもく
あまのあめをじて春ごよみお春とらとをさすわ
ほやさん用と市松人形を教子のかりはてりや
本家の毎りの櫛をたんととやう紋おも何れ
は保よをさるれを本春をさうて我がどの櫛は張
紙をせらまといを人まが通ふはあまのいしおあまの

なほいしておくとよは後せざるよとておこ
のちびやうしくと懐へ入る件のみよのれ
を見て何加は屋敷活計等刀子刀松とよこハテ
大坂よりおこるを流ぐる中かの

二度の筈

おまへ外福内よこばらのたぐやう家内おあ
弟お杉さんおの丁児ををかりあらの甚株
よぬいあゝものやナアわの人の心をいんせいやりま
ちふと甚株らのまさをと十七八社をうまひの

古ふのよ家

おあひて定家のお城を西村せし人他より来
る人よんせられぶコレい何よあおであらうまは
藤はじうの守りよもあつたんとたづひもなださ
かちあふんあせぬが是のぞい今がぶれどあの中あ
反古の中あそのあきども百あふも二百あふある
そのこしやせんあぶあの人行をほびしそれああ
さるものであがるのねしくせうに大いあ浪もあ
あつものや丁とさやうあ反古をきあふあて

巻四 五

どくをとりつくとくをさすなりた

吐く之席日夕涼巻の四終

此所へ書流し一歩扱るは

古今俄選 新編後入 全部入冊

安永俄選 同形 全部入冊

此俄撰へむじより今も勢を浪花はの甚素後入
及び後ほたるむじろくを俄を敷多め流わよと本と
初も本は酒の二月より各録新以超向の俄をのめ
去のおくはを乞後まへを系をのりはは友選集
巻もも本酒は俄集あらく新他敷多め流わよと本と

吐會三席目 冬詩軒素從撰

夕涼新話集巻の五

目録

八十一	間渡遠	勇理	八十二	藪	楠	李
八十	丁児の文免	菅水	八十四	あ	鏡	キ
八十九	夫婦の若笑	可棟	八十六	弥生の日記	我	笛
八十七	老如房	出山	八十八	金	右	一

女帝の心得

文十

吉田後班

金井

九十二

天の川

百五

都の異國

五あ

九十三

如月

示光

いづまを柳

出石

九十四

稲田の苗

柳巳

田舎侍

遊洲

九十七

者素く

鬼丸

おあづり伏向

里

九十九

百洞系

麻石

風の神

二弓

夕涼巻の目録終

けんと遠い

幸ふ者二更月を力てよれい何といふ佛なるやといふ
 事あるのむらあてよれい二更月もて力てよ
 ぶらうといふ身肉は子ヨボくあのお茶てあ
 じうてもあされいあうとまをイユくあまの熱痺力を
 はずく遠者よ導くを強くとおれやあはしは我思ふ
 西一弦をめんあてますとあられはつこそれあまはじも
 是のいふあまのいふあうけませうとあひあをあま
 二更の是(お)ははるむ移る遠く二更の(お)ははるむ

ぼよ教をうつ合コレおんよ娘のせじな人の
 とホレ油子ひいあらひびいせしけりての娘が
 くれをたまあさうたういともあはひよ来あ
 であろと井戸をのぞいて様をくろひまの娘あ
 きよあうでの井戸あうあくとまうしづ隣の
 さんが井戸より水をさひて様はけコレおんそ
 あらのぬーとよう井戸の水をあひひいへ
 あてるとたさよとみせのあひおんはかたで隣の
 お肉はさんあんがまうあひいもあひいよと

さいわいひいあひいあひいあひいあひい
 みるあひいあひいあひいあひいあひい
 又アイ乳遠ひよあまをいで井戸の中をんやあんせ
 とあよあまあんと井戸を祝ひてハットあひいあひい
 ぬ教コレさん井戸あひいあひいあひいあひい
 ひぞとアアはあひいあひいあひいあひいあひい
 まいぬのようあひい
 家よあひいあひいあひいあひいあひいあひい
 昔ーひいあひいあひいあひいあひいあひいあひい

...

...

ぬきぐねもあつたよなりくるるがごとく中の公をせめて
 ぶとよよいふ命多きが申居いよいりもとてそまらふ
 ぞいれいひのわびざんせぬそまざんあとのあうけ年
 月ぐらゝてまうらきち居ておでせすみ年といふ年月
 をくらじま候本てもいふまに干しとひといふ月日をおひの
 こものといひたれは病ぐそをよこしててそんちう響せん
 おまももあふ又とごぞいれたあはる時をひ

弥生の日記

吉形くさうが今と使諸方の孫花おひく人あは

ひるる大坂よりと姉川せうと東岩ち陸も寄来
 法寺などの橋達かまよよは病字と氣は
 ころおて萬者の人きいづこはじぐもよひる津吉社と
 中名医うぶざらまん見よんておひくいあされぬらと
 を焼さうしてはあひまふらあむき病であざらまん
 いらさぬナアああひもけらあれはまのらもあまらぐ
 あのみのおそとむくもの幕幕さんう總さんうイーエあ
 あいのき病のひとせんじゆんをちうとはあひが
 しゃんが

茶袋の神

漢沙羅^{シラ}はあ^ハの病^ヤ者^シの方^シ吹^フあ^ハぐ^シと^シ留^ル信^シ
 お^ハり^シ紀^ノ西^ノ吹^ケ付^ル一^ツぶ^シの^シ老^シ古^シお^ハる^シあ^ハ日本^ノ人^ノ来^リし
 進^ム多^クを^シ取^ル豆^ノを^シ取^ルい^フぐ^シた^シを^シ連^レて^シ道^ノよ^シて^シう^シを^シ
 三^ツけ^シを^シお^ハま^シま^シと^シ一^ツお^ハ久^シサ^ヨシヤ^ノと^シう^シい^フあ^ハだ^ハ
 お^ハり^シの^シい^ハあ^ハ日本^ノの内^ノう^シと^シ同^シハ^ハイヤ^ノ物^ノ難^シを^シい^フ
 板^ノ口^ノう^シの^シま^シと^シお^ハま^シを^シ取^ルけ^シを^シ今^ノ日本^ノよ^シの^シ世^ノの^シ金^ノを^シぐ^シ
 ち^ノお^ハり^シな^シぐ^シま^シと^シい^フあ^ハた^シう^シよ^シと^シわ^シく^シあ^ハま^シす^シと^シい^フ
 イヤ^ノま^シと^シあ^ハよ^シ京^ノ都^ノへ^シ身^ノを^シま^シて^シお^ハり^シ

如月



の枝(むね)がズンリヤチヤチヤはしんよんせいの
よどのぞとるぬま^{かこ}とろく^{かこ}し^{かこ}のま
のが^{かこ}い^{かこ}な^{かこ}し^{かこ}た^{かこ}の^{かこ}さ^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}
さ^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}
そ^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}
と^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}
か^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}

田舎帖

今平よ元のま^{かこ}の^{かこ}田^{かこ}舎^{かこ}帖^{かこ}新^{かこ}所^{かこ}は^{かこ}あ^{かこ}て^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}
位^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}
田^{かこ}舎^{かこ}帖^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}
ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}
の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}
福^{かこ}田^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}
ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}
ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}の^{かこ}ま^{かこ}

せりまらまぢりくく右の清きゆと足まじりまじりゆで
おまじりまじりゆでゆまじりまじりゆで
なりととて下まじりまじり
谷伊勢傳

風の神

近年凶者荒際よてよら凶者及もまじりくまじり
中ぶおまじりまじりまじりまじりまじり
若一みまじりまじりまじりまじりまじり
風サアまじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじり

入まじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじりまじり

新清書云云

明安町二丁目八百五十四番

高橋松治軒

御書日物所

心秋橋橋所筋を日本橋本町

書物屋久藏合

浪速書肆

道場橋日本橋を下小西町

橋磨屋九右衛門

